



だより



R8.9.2 Vol.17

保護者の皆様へ 一二学期開始にあたりー

学校という場には、長い間、言葉にしなくても共有されてきた“呼吸”のようなものがありました。子供たちのためになると判断すれば、担任が少し手間をかけたり、柔軟に対応をしたりする。それは制度ではなく、人としての自然なふるまいでした。(コスパやタイパでは割り切れない大切な部分です。)

しかし近年、その“呼吸”が通じにくくなっています。ある担任が、子供たちの成長を願って行ったちょっとした好意が、違う担任は「なぜしてくれないのか」というご意見につながることがあります。善意が前例となり、前例が“当然のこと”として制度化されていく。その結果、校長としては「公平性」「過重業務から教師」を守るために、本来なら柔軟にできるはずのことを控えざるを得ない場面が生まれています。

子供たちの姿は一人一人違うように教師もまた得手不得手があります。自分の得意とする分野で子供たちとの関係を作ってほしいと伝えています。ただ、私たち教師は専門職としての資質の向上も求められています。やるべきをやれない教師であってはならないとも伝えています。しかし全てを明文化し、線を引き、制度に落とし込んでしまうと、子供たちの“今”に寄り添う力が弱まります。私が大切にしたいのは、「制度として整えるべきこと」と「人として寄り添うこと」の境界をその都度ていねいに見極めていく姿勢です。

多様な価値観があふれ、不文律(暗黙のルール)が通じにくい時代だからこそ、私たちは、子供たちのために必要な対応やその線引きについて、これからも率直に保護者の皆様とも対話を重ねていき、折り合う地点やお互いの納得解を探していきたいと考えています。今学期もどうぞよろしくお願いします。

四方山話松蔭 ver. 其の十七(夏休みを終えて…少し真面目なお話)

まずは子供たちが元気に登校してきたこと、一番の喜びです。たかが40日余りですが、久しぶりに会った子供たちはひとまわり大きくなっているように感じました。成長期という言葉を実感する瞬間です。

さて、上段で少し硬い話をしましたが、二学期開始にあたり、ここでも少し、私の思いを吐かせてください。

教員の不祥事がニュースになるたびに、学校ではその再発防止に向けての共通理解、ケースによっては指導の周知・徹底を図っています。特に子供に対しての非違行為は、**子供が未来への礎を築く活動を導く立場にある教師**が絶対に行ってはいけないものです。そしてそんなことが二度と起きないようにルールづくりも進められます。ただ、私はそこに引っかかるのです。例えば「子供との身体接触は極力控える。」そんなルールが明文化され、制度化されるとします。が、子育てや教育とスキンシップは年齢が低くなればなるほど切っても切れない関係です。じゃあどんな場合ならいいか。「子供がパニック状態になり、抱きついてきた。なだめるためにハグをするのは可能。ただし5秒まで」「子供が不安がって手をつないできた。ハイタッチは可とする。」極端な書き方をしましたが(実際にはそうはなっていないですよ。)これから先、そんな風に細分化されていく可能性があるのです。「バカバカしい」そう思います。それなら身体接触など起こりえない生成AIが教師になればいい。

今、社会は「リスクゼロ社会の実現」に向けて大きく動いています。大切なことです。ただ私たち教員は子供が様々なリスクに直面した時、どう対応するか、どう回避するか、それを「生きる力」として教育しているのです。

マニュアルなら生成AIが語ってくれます。ほんのわずかの人間が犯した非違行為のために、人として大切な触れ合いが制限されるような現場になっては決してならない。そんなことを強く思う二学期スタートです…。

----- 切り取り線 -----

便りの感想や学校への要望等ありましたら、お聞かせください。今後の学校経営・運営に役立てていきたいと思っています。